



りんこの「そりゃ教師冥利に尽きるやろ～!!」

芝中学校（しばちゅうがっこう）

手を放して抱きしめる

質問「気温が35℃以上になる日は部活をサボりたいです」

答え「熱中症になる前にサボりなさい」

質問「ああ、彼女が欲しいよ!!!! どうすればいいですか」

答え「わかる。その気持ちよくわかる。でもね、なんともならない時はあるのよ。悶々としなさい。悩め、少年!!!」
これは相談室前に掲示されている「何でも相談用紙」の一部である。「生協の白石さん」を真似て作ったものらしいが、記入済みの相談用紙が束になって置かれていた。

この学校は本当に深い。いろいろと理由はあるのだが、その大きな理由のひとつに遠藤教頭の存在を挙げておきたい。教頭はこの学園が誇る「こころの相談室」の専任カウンセラーである（教頭の他にも5名の認定カウンセラーがおり、常時、3人編成で対応している）。今や、どの私立でも「カウンセラーはいる!」と豪語するが、その殆どが非常勤の週2回だけ来るような外部カウンセラーである。しかし芝はちょっと違うのだ。カウンセリングなんて言葉が一般的ではない20年も前から、この学校には相談室があり、先生はそれ専門におられる人なのだ。教頭がそれ専門に常駐している学校があるのか!と驚いた。しかも教頭は寺の住職でもある。週末は田舎の寺に戻るとい生活はずっと続けておられるそうだ。

助川校長がアタシに出会って一番最初に言われた言葉が「どのような生徒が来てても対応するのが芝のスタイル」というものなのであるが、要は校長は「受験さえ突破してくれるならば発達障害の子どもも面倒みますよ」と宣言しているのだ。相談係というものは「どうやったら夢を語れるようになるのかを手伝う係」だそうで、その相談範囲は生徒は当然、教師、OB、なんと受験生の母にまで及ぶというからびっくりだ。年間2000件の相談を受けるそうで、芝の大方針、子どもたちを「手を放して抱きしめる」ということを最前線で実行している部隊なのだ。ついでに言っておくと芝には「不登校・親の会」がある。月1回酒を飲みながら親睦する会だそうで、芝のステータスだと説明された（深すぎる、この学校）。

アタシは随分と長いこと、この遠藤先生と話をさせてもらっていた。気が付いたら夜になっていたのだ。先生の語る話、ひとつひとつに涙していたからだ。その中で、もしかしたら教育ってこういうことじゃないかって思ったことを挙げてみたい。皆さんは、どうお考えになるだろうか。

「りんこさん、僕は週末は田舎のオンボロ寺の住職でしょ? (笑) 僕はね、ときどき寺に子どもを連れて行くんですよ。最近だと、こんなことがありました。

中2～高2まで不登校の子がいてね、何て言うのか、すごく気が弱くてね、三分の一以上は教室には入れずに相談室で過ごしていた子でした。同年代と一緒にいることが難しい子でね、結局、高2の3月で学校辞めちゃったんですよ。

『どうしている?』って聞いたら『ブラブラしている』って言うんで田舎の寺に呼んだんです。あそこには僕の姉が住んでいるんだけど、そこに住めよって言ってね、6月から寺に住むようになりました。

朝は姉に起こしてもらって『オイ、ヒロト(仮名)! 鐘ついて来い!』って言われながら、1年近くきちんと朝夕の鐘つきしたんですよ、毎日ね。

週末は僕が行くから、一緒に過ごして。僕の指導? いい加減なものですよ、僕は英語の教員なんだけど、ネットから(英語バージョンの)エロ本取り出して『これ読め!』だからね。でも意味を知りたい一心で辞書引くようになるから、人間って面白いよね(笑) そうしたら大学に行きたいって言うようになったんですよ。やっぱり好きなコンピューターの道に進みたいって言うようになった。大検も取って、大学も受けたんですよ。なんと受かってね、すごいでしょう?

そうこうしている内に3月の彼岸になったんですよ。その日は檀家が全員来るような日でね、僕の後ろに座らせて供養のお経を一緒に唱えさせたりしていました。それが終わった後『もうこの村ともお別れだから、一言言え!』って言ったならね、それまで人前で何かを言うなんてことは考えられない子だったんですけど、大勢の人の前でヒロトはこう言ったんですよ。

『受け入れてくださってありがとうございます』って、泣きながらね。

『卒業するけど、また戻って来ますから』って。

人って求められるところにいられたら、人生としては幸せなんですね。ヒロトはひとりで生きているわけではないって感じ取ってくれたんですよ、色んな人がいて、はじめて自分の人生があるんだってね……。

大学入ったヒロトに『オイ！たまには寺に來い！』って言ったら、アイツなんて言ったと思います？『悪い、先生！サークルがありますから（忙しい）』

嬉しかったですよ、りんごさん。本当に嬉しかったですよ・・・。

僕はね、禅宗の坊主なんで、一期一会って言葉が好きでね。もうこの人には二度と会えないかもしれないって思うから、一生懸命、人に会いたって思う。一生懸命、人に会うことは大切なんだって子どもたちにも伝えていきたいですよね」
真っ暗な帰り道、東京タワーに照らされながら、目が真っ赤なアタシは「夜で良かった」って思っていた。



Copyright © 2012 Obaket. All rights reserved.